No.832

栄光

説教・「信じて生きよ」種房惇子教師……1
特集・イースター 希望の光……2
臨時教会総会報告……5
図書茶話会だより……5
説教・「善悪を見分ける」岸俊彦牧師……6
世田谷地区一致祈祷会報告……7
長老のファイル…7
牧師の書斎から…8

説教

『信じて生きよ』

ルカによる福音書21章34～22章6節

種房惇子

受難節を前にしてイスカリオテのユダの裏切りを取り上げ、この出来事を通して神のご計画とみ旨がどこにあったかに聞きます。まず注目点は、この記事の順序です。21章後半で、主イエスの磔刑後に終末に起こる天変地異や誘惑や迫害等の試練が襲っても惑わされることなく、「目を覚まして」私を「信じて生きよ」と弟子たちに諭した後に置かれている点です。次に、ユダの裏切りの理由が何も記されず、一言「ユダの中にサタンが入った」とだけある点です。ユダが主イエスを銀貨と引換えに祭司や律法学者に売り渡した罪の処断よりも、「目を覚まして」私を「信じて生きよ」に重点があるのです。ここに神が独り子をこの世に遣わされた究極の愛、つまり私たちが一人も滅びずに永遠の命を得ることと、裁くためではなく救うためであることが示されているのです。罪を犯した者が、悔い改めて神に立ち返り、神の許に立ち続けることが願いなのです。

主イエスの十字架刑を知ったユダは、初めて我に返って「罪のない主イエスを売り渡して罪を犯した」と気付き後悔して、銀貨30枚を祭司長たちに返そうとしましたが拒否されました。ユダは、銀貨を神殿に投げ込んで首を吊って死んだと記されています（マタイ27・3～5）。この結末を神はどれほど悲しまれたことでしょうか。

旧約の預言者は、主イエスの誕生前から十字架と復活を預言していました。十字架と復活は、神の初めからの人類救済の計画であり必然の出来事だったのです。たとえユダの裏切りが無くても、神のご計画は何らかの方法で必ず実行される必然の出来事だったのです。十字架を恐れて逃げ隠れして裏切り、復活の主イエスに出会って再び力を与えられたペトロはユダの出来事を「聖霊がダビデの口を通して預言している通りこの聖書の言葉は、実現しなければならなかったのです」（使徒1・16）と告げています。

ユダには、罪に気付き後悔した時に神に立ち返るチャンスがありました。しかし彼は、自力で罪を償おうと命を絶ってしまいました。主イエスの教えの本質を見損なっていたのです。もしユダが生き続けて復活の主イエスに出会っていたら、主イエスが求めておられたのが、信じ生きて福音を述べ伝えることだと気付いたかもしれません。真の悔い改めが、主イエスに立ち返り、赦しと救いの福音を受け入れ、生きて福音を、救いの喜びを伝えることだと分かったかもしれません。神様の真の愛に飛び込んで、最後までその喜びの確信を人々に伝えることが出来たかもしれません。

裁きは、神がなさることであり最終的な決定は、憐れみの神の御手にあり、主イエス・キリストに委ねられているのです。主イエスの十字架の折に横で磔にされた死刑囚は「あなたこそ罪のない神の子です。御国に於いて私のことを覚えてください」と信仰告白して、「今日あなたは私と共にパラダイスにいる」との最終的な救いが告げられました。地上では死刑囚であった彼は、信仰的決断により意志の方向転換をして神に向き直り、死の直前に救われ、永遠の命が与えられたのです。

罪を知りながら、あるいは知らずに罪を犯し続け日々悩み苦しむ私たちです。ですから週毎に教会に集い、神様のみ前に立ち返り、罪を告白し赦していただき、神の栄光を讃える礼拝を献げているのです。礼拝で神様から新たな力を与えられ、新たな週を生きるのです。礼拝が私たちの命綱になっているのです。私たちのために命を捨てて、愛を貫かれた勝利の主が共にいてくださり「信じて生きよ」と呼びかけてくださるのです。

イースター

希望の光

3/31はイースター。
イエス様の十字架の受難を黙想し
死からの復活を祝う喜びの時を迎えます。
紛争や災害が続く不安定な現在こそ
希望をもってイースターを迎えましょう。

復活の主イエスに生かされる

岩崎真理

父は米子教会の牧師として45年を過ごして、今98歳です。日曜日の家庭礼拝説教準備と手書きのプログラム準備と祈りの日々を送っています。説教要旨も書いた礼拝プログラムは父母の兄弟たち、子どもや孫たちに送ります。

三女由希の結婚相手の巧は牧師のひ孫です。牧師の家の貧しさや苦労を祖父や大伯母から聞いている彼が父と初対面の際、「戦時中の弾圧（ホーリネス教会牧師であった祖父は投獄されました）や苦労を知っているのになぜ牧師になろうと思ったのかを聞きたい」と言い、父も喜んで話しました。

父は給料の高い満州航空で機関士として働き、終戦半年前に現地応召で航空隊に入隊、特攻隊の名簿にも載っていました。満州でソ連軍の捕虜となり、2年後に北九州戸畑の家族のもとに帰国しました。衣食住に事欠く日々の中でも家族皆が伝道に励んでいました。父は信仰の確信を求め祈る中で、数年来の罪を示され、悔い改めることの難しさ、罪深さを知らされた時に「その罪のために私が死んだのだ」との主イエスの声を聞き、主イエスから注がれる愛が溢れ感謝と喜びが湧きあがりました。この愛の素晴らしさ、何物にも代えられない幸いを知り、この偉大な方のために生きたいと思いました。

それでも牧師の労苦を知っている身で献身するには覚悟が必要で、召命を求めました。召命があれば苦しみに意味がある、これを一本の綱にして行けると祈り求め、ローマ人への手紙12章1節「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」、ピリピ人への手紙2章の「すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい」を与えられ献身しました。今も主イエスに生涯すべてをお委ねし、主の御名が崇められるように、御国が来ますようにと祈り、宣教に励む父の姿を見て、主が用いて生かしてくださっていることを感謝しています。

イースターの喜び

大橋ゆり

年始1月7日に、イタリアの歌劇場と音楽院で歌手のコーチングを専門とする講師を大学に招いて、特別レクチャーをお願いした。題して「イタリア伝統の歌唱法～誤解されてきたベルカントの真実～」。タイトルからして既に刺激的だったが、その内容はまさに目から鱗と言うべきものだった。

講義の中で18世紀イタリアの高名な声楽教師が著した書物のあることが紹介され、すぐに図書館で借りてみた。すると、訳者として私の中学時代の音楽の先生のお名前を発見し、とても驚いた。当時の私にとって、音楽の教師と、クラブ活動の聖歌隊指導者という認識にとどまっていたあの先生が、このような目覚ましいお仕事をされていたとはまったく知らなかった。

しばらくその時代の思い出にひたっていると、甦ってきたシーンがあった。高校卒業後その先生と一度お会いする機会があり（先生は別の学校に勤めておられた）、道まで出迎えてくださった先生が開口一番「イースターおめでとう」と言いながら、私に卵と小さな花束を渡してくださったこと。どういういきさつで再会がかなったのか、前後のことは残念ながらまったく記憶にない。しかし、その時の先生の晴れやかなお顔と、その一言で緊張気味だった自分の心が一気にほどけたことを覚えている。

世界各地で争いの終息が見えず、国内では激甚災害に指定された能登半島地震で幕を開けた２０２４年。私たちの心は大きく揺れ、打ちのめされている。

それでもなお、私たちには復活されたキリストの恵みが与えられ、「イースターおめでとう」と言い交わすことの出来る喜びがある。感謝である。

「人間に頼らず、主を避けどころとしよう」（詩編118・8）

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」（ヨハネ11・25）

イースター・パレードの頃

佐々木慶太郎

クリスマスというと、ビング・クロスビーの『ホワイト・クリスマス』が、イースターというと、ジュディ・ガーランドとフレッド・アステアの『イースター・パレード』が頭に浮かぶ私です。ビング・クロスビーのしみじみと語りかける様な歌声が心に沁み、フレッド・アステアの軽快なタップダンスが私の身体をわくわくさせました。２つの映画が日本で初めて上映されたのは、私が高校生だった１９５０年頃だったのです。

『イースター・パレード』はジーン・ケリー主演で撮影が進められていましたが、彼がプライベートのフットボールで足を骨折したので撮影が中断され、当時引退宣言をしていたアステアが代役に選ばれました。ケリーから直接アステアに依頼があり、これで彼は映画界に「復活」しました。そのジーン・ケリーの『雨に唄えば』が日本で公開されたのは１９５３年でした。その頃から、テクニカラーの魅力的な映画が日本で続々と公開されました。代表は『風と共に去りぬ』でしょうか。70年以上前の古い話をしました。ここで話題を変えることにしましょう。

インマヌエル会では今、カール・バルトの『教義学要綱』を学習中です。4月の会では私が、13番目の項目「われらの主」を担当しますので、レジュメの作成に今から苦闘しています。難解なテキストですが、師走に卒寿を迎える私には得難いボケ防止になると、前向きに捉えています。

主権的な決断を持って、人間としても完全な姿で人間世界に降りて来られ、「見捨てられ、罪に定められた人間を、すべての罪と死と悪魔の力から救い出し、買い戻し、ご自分のものにしてくださった」主イエス・キリストは、「われわれが、この方の御国において、この方の下に生き、そしてこの方に仕える」ことを求めておられます。岸先生のアドバイスを受けつつ学びを進める5人の輪に加わろうという方は居られませんか？

主のとりなし

鈴木こづえ

1月1日の夕方のテレビの画面に突然「地震が発生しました。強い揺れに注意してください」とテロップが映りました。次に「津波が発生しました。直ちに避難してください」とアナウンサーの絶叫が響きました。何が起きたのか。これからどうなるのか。能登半島に強い地震が発生したのでした。

七尾から珠洲に嫁いだ友人が暮らしているので心配になりました。直ぐに安否を確かめたいと思いましたが、混乱の最中に安全な場所から「大丈夫?」などと連絡できませんでした。何と言葉を掛けたら良いのか、気づかう言葉が出てこないのです。「友人に語る言葉を私にください」と祈りました。「生きてますか。ケガをしてませんか。無事ですか」とメールを送りました。「店は潰れましたが残った建物でキャンプ生活をしています」と返事が来て、ほっとしました。神様が友人と私の間に入ってとりなしてくださったので、言葉を掛けることができました。様子が分かり感謝でした。

私は20才のイースターに洗礼を受け、今年70才になるので50年の信仰生活をしてきました。受洗した時は自分の罪も、キリストの十字架も何もわかっていませんでした。日曜日の礼拝、集会の出席、兄弟姉妹との交わりの中で少しずつ「神を愛し、人を愛する」という教えを意識するようになりました。「神様が私を愛してくださっていることを覚え、感謝し、私の隣人を愛す。自分が犠牲になっても人を大切にする」。日々の生活でこの教えを守っているかと問われると、毎日「神様ごめんなさい。守れていません」と謝っています。自分の正義、価値観で判断し行動してしまうのです。災害に遭って悲しみに沈んでいる友人に慰めの一言も掛けられない私という人間。自己中心的で人を傷付けても気づきもしない私の罪を神様は教えてくださり、隣人との間をとりなしてくださっていることを覚え、感謝です。

困難を越えて

村田佳子

ロシアによる侵攻を受け、日本へ避難したウクライナバレエダンサーの家族と交流を持ち、支援を続けています。

2年前、連日のニュースでウクライナが混乱に陥る状況を目の当たりにしました。キーウのバレエ団で活動するダンサーたちも避難を余儀なくされ、安全を求めて日本へと向かいました。私はNHKの報道を通じて彼等の苦境を知り、即座に家族と連絡を取りました。バレエ教師仲間たちにも情報を伝え、都内近郊のバレエ教室で指導する機会を作り、僅かな一歩ですが支援を継続しています。

彼らは逆境を乗り越えながらも、バレエへの努力を惜しまず才能を維持し続けています。熱意と情熱は世界中に届き、多くの国々から公演依頼が舞い込むようになりました。昨年からは自身の団体Grand Kyiv Balletを形成し、ウクライナのバレエ団として世界各国を回る公演を行っています。この冬はスウェーデン、フィンランド、スイス、ドイツ、オランダ、フランス、アメリカ。夏はオーストラリア、ニュージーランド公演まで予定され、異例のオファー数です。年末から私の教え子の一人もウクライナ支援のためバレエ団に入団し、公演ツアーに参加しています。現在はフランス全土をツアーし、2ヶ月が経過しました。「毎日多くの観客の声援を受け、ウクライナへの支援の声を実感する」と昨日も連絡をもらいました。

彼らは、戦争という困難に負けず前を向いて進む意志の強い人たちです。私たちは彼らをサポートすることで、彼らの才能を世界に輝かせる一助を担っています。ウクライナのバレエダンサーたちの活動は、人々に希望や励ましを与え、芸術を通じて平和と団結のメッセージを広めています。彼らが更なる成功を収めることを願います。そして、イースターを迎えようとする今、私たちは新たな始まりを迎え、困難を乗り越えるための力を持つことを祈ります。

臨時教会総会報告

2月4日の臨時教会総会にあたっては開催事由が3つありました。それは岸俊彦牧師が70歳定年を迎え牧師を辞任することへの承認、その辞任に合わせて教会規則の一部を変更することへの承認、そして岸牧師の後任として松谷祐二牧師を招聘することへの承認を教会総会で得ることでした。

どれもとても重要な案件ですが、第1議案・岸牧師の辞任、第3議案・松谷牧師の招聘については事前の教会員への告知もあって特に質問、意見もなく賛成多数により可決されました。

第2議案・担任教師招聘規定変更に関する件では、担任教師招聘規定第1条から担任教師の「任期4年」の記述を削除することの意義についての質問と、その部分を削除すると同招聘規定第3条との整合性に問題が出るとの意見が出ました。それに対して、日本基督教団教規では任期制は認めておらず招聘制としていることから、今回経堂北教会においても、教団教規にならって「任期4年」の記述を削除し任期制を廃止すること、担任教師の辞任や解任は教会規則にあるとおり、教会総会で議決するという説明がありました。また担任教師招聘規定第3条との整合性については、第2議案・担任教師招聘規定変更に関する件に修正議案として、「同招聘規定第3条を全て削除する」が出されました。修正議案を含む第2議案は、挙手による採決を行った結果、賛成多数により可決承認されました。

いよいよこの文章を書いている今から岸牧師の退任まであと1年1ヶ月となってきました。神様のお導きとは言え、1983年の伝道師としての就任から41年もの長い間、経堂北教会での献身的な牧会と地域への伝道、そして日本基督教団東京教区総会議長等の重要な役職を歴任されてきた岸牧師。感謝の念は表現の仕様がありません。最後の1年でどれだけ的確に経堂北教会の歩みにおける岸先生のお働きを次世代に引き継いでいけるか、長老会は身の引き締まる思いでこの1年を過ごして参ります。どうぞご理解、ご協力のほどお願いいたします。（大西　順）

図書茶話会だより

私は本が好きです。見ているだけでも楽しくなります。でも気に沿わないものもあります。読み手の私が主人公と一緒に考えられないとだめです。この頃は、小さい字が読みづらく、片目をつぶって読んでいることが多いです。歳をとると、できないことが増えていやになります。

では近頃気に入っている本をご紹介しましょう。ほしおさなえ著『紙屋ふじさき記念館』で、7冊目が去年の11月に出ました。第1巻は4年前、ずいぶん長い間楽しんでいます。主人公は吉野百花、7巻目ではアルバイト先だった紙の会社（和紙記念館担当）に就職。日本橋にあったビルが老朽化し、周辺の大規模開発にともなって、記念館は川越の古い商家に入ることになりました。日常の細々したやり取りや母親との会話、亡くなった父との思い出、最後は新しい会館で開館式の司会をしているところで終了です。

ほしおさなえには、川越を舞台にあと2作小説があります。『活版印刷三日月堂』4巻と『菓子屋横町月光荘』5巻です。『活版印刷三日月堂』は、主人公弓子の父亡き後、祖父母が川越に営んでいた活版印刷『三日月堂』を受け継ぐところから始まります。『菓子屋横町月光荘』は大学院生が主人公で、家の声が聞こえる話です。このように並べてみると、同じ作家が違うテーマで本を書き綴った意味が何となく分かります。異なった内容で書き進めたいと思ったのではないでしょうか。どの話も、日常のやり取りが納得できるのです。さあっと読んでいく中で、素直に読みとれます。単行本を全部ならべたら、すごい量でした。読書が趣味とは、こういうことなのかとも思いました。

本を読むことは自分を探すことにもなります。「こういうことなんだ」とわかったり、「そうだ、そうだ」と同感したりします。これからも読んでいて楽しいと思える本をどんどん読んでいきたいです。その中から少しでも成長してきたいと考えます。（林崎光子）

説教

『善悪を見分ける』

申命記7章6節～11節
ローマの信徒への手紙16章17節～20節

岸　俊彦

「聖なる口づけをもって、互いに挨拶を交わしなさい」（16・16）と勧めたパウロが、いきなり「分裂やつまずきを引き起こす者たちを警戒しなさい」（16・17）と警告しました。教会にも、分裂に興味を持ち、混乱を楽しむ人がいるからです。パウロ自身批判されました（3・8）。誤解、曲解、無理解、それぞれの思惑から反発し、パウロの教えと使徒たちから受け継いだ教えを否定する者たちが教会にいました（ガラテヤ1・7）。

「こういう人々は、私たちの主であるキリストに仕えないで自分の腹に仕えている」（ロマ16・18）とパウロは糾しました。キリストの名のもとに語りながら、実際はキリストに仕えるのではなく、自らの欲求を満たすために語る伝道者がいました。妬み、争いの念にかられ、利己心からキリストの福音を語るのです。自身の名を挙げ、誇るためでしょうか。

甘い言葉やへつらいの言葉、聞こえのよい言葉を巧みに使って、純朴な人たちをだます者がいます。伝道者でありながら、現実にキリストの十字架の敵として歩んでいる者がいます。おのが腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、地上のことしか考えていない者がいます（フィリピ3・18、19）。

ローマ教会の信徒たちは従順でした（ロマ16・19）。ただし従順には知恵が必要です。キリストは、「あなたがたは蛇のように賢く、鳩のように無垢でありなさい」（マタイ10・16）と教えてくださいました。パウロは、「私はあなたがたが善にはさとく、悪には疎くあることを望みます」（16・19）と語りました。善とは御心を知り、御心を行うことです。悪とは己が腹に仕えることです。甘い言葉やへつらいの言葉によって騙されることです。御心を弁えないことです。私たちは、悲しいかな、善にさとく、悪には疎くあることができません。御心を弁え、御心を行うことができません。だから教会に分裂や躓きが起こります。

ニーバーの祈りを思い出します。「神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ」。

悲しいかな、私たちには変えることのできるものと、変えることのできないものとを、見分ける知恵がありません。御心を見極める判断力がありません。だから私たちは、「識別する知恵を与えたまえ」と祈るのです。主の御前に集められて礼拝するのは、「善にはさとく、悪には疎くある」知恵を与えていただくためです。

「主を畏れることは知識の初め」（箴言1・7）です。主を畏れるとは、何よりも私たちが主を礼拝することです。この世の知恵では、御心を知ることはできません。「善にはさとく、悪には疎くある」ことはできません。「蛇のように賢く、鳩のように無垢である」ことはできません。十字架に付けられたキリストを礼拝してこそ、神の力、まことの神の知恵が私たちに与えられます。

「私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです」（1コリ1・23、24）

今は悪い時代です。しかし、この手で悪に対する勝利を実現するなどと思い上がってはなりません。「平和の神が、サタンを私たちの足元で速やかに打ち砕かれる」（16・20）ことを信じて、望み待つのです。キリストを遣わしてくださった恵みと平和の神が、教会の分裂や躓きに、私たちが耐え、乗り越えることができるように、力と知恵を与えてくださいます。

世田谷地区一致祈祷会報告

1月21日午後3時より、祖師ヶ谷大蔵にある日本福音キリスト教会連合宣教教会にて「２０２４年世田谷地区キリスト教一致祈祷会」が開催されました。世田谷地区キリスト教一致祈祷会は２０１１年3月から始まり、2年に1度エキュメニカルなキリスト教祈祷会として開催され、宣教教会のほか、世田谷にあるカトリック・日本聖公会・日本基督教団・日本バプテスト連盟等の複数教会で共催しています。

一致祈祷会の式順は、前回から開催する教会のスタイルに合わせることになったそうで、司式は宣教教会の児玉武志牧師、宣教はカトリックの淳心会、オノレ・カブンディ司祭が「愛することに関わりを持つこと」と題して話されました。世界情勢が混沌としているこの時代にとてもふさわしいメッセージでした。讃美歌は経堂北教会の礼拝と同じ讃美歌でしたが、主の祈りは聖公会・カトリック共通口語訳、使徒信条は口語訳で、慣れ親しんだ文言とは一部違っており、新鮮に感じました。

席上献金は「社会福祉法人福音寮」、日本キリスト教協議会、カトリック中央協議会に献げられます。「福音寮」は世田谷区上北沢で昭和20年11月に戦災孤児を預かることから始まった児童養護施設で、今はグループホームや保育園なども運営、「家庭的な支援」を理念として活動しています。

私は前回（２０２２年）の一致祈祷会にも出席し、まだコロナ禍の最中だったこともあり出席者が非常に少なかったのを覚えています。が、今回はとても多くの方々が出席されていました。

特にカトリック教会からの出席者が多く、共催の赤堤・成城・松原からは各々8名前後が出席、調布や多摩の教会員の方も出席されていました。日本基督教団は梅ヶ丘教会はじめ10教会が共催していますが、各教会平均2、3名（経堂北教会は岸牧師含め3名）の出席にとどまり、残念に思いました。近隣の教会を知る機会でもあるので、次回はもっと多くの方が出席されることを祈っています。

（尾藤美紗子）

長老のファイル

先日の教会臨時総会では、岸俊彦牧師辞任、担任教師招聘規定変更、主任担任教師招聘に関する3つの議案が無事承認されたことに感謝します。招聘規定変更の議事に関しては、書記に選任された長老として、手元に教会規則集を持たずに総会に臨んだことは恥ずかしいばかりです。信仰によってのみ義とされる私たちですが、この世との関わりの中で、きちんと会議や規則が外形的に社会から認められるようにしていくことが長老会の大切な役割のひとつであるのですから、そうした点でも岸先生が辞任された後、きちんと新しい牧師を支えられるように、1つひとつの事務的な事の理解を深めて遺漏なくできるような力を身に着けたいと改めて感じました。いずれにしても、教会員の皆で新しい経堂北教会の伝道の出発を総会の議決を通して確認できたことを嬉しく思います。

西南支区の常任委員としての2年間、社会担当として「平和と核廃絶を祈るつどい」「平和講演会」を開催したり、ブックレット「キリストの平和Ⅲ」の発行に向けての話し合いをしてきました。次年度になりますが、前任牧師四竈揚先生の原稿も掲載される予定です。以前発行された平和講演集「キリストの平和Ⅱ」が、教会の週報ボックスの上に置いてありますので、興味のある方はぜひお持ちになってください。

教会員の減少など、気持ちが落ち込んでしまうこともありますが、この2千年あまり、教会はこの世的には様々な困難がありました。しかし、神様の恵みはどんなときでも変わることはありません。先のことを憂うのではなく、キリストの恵みの中にある私たち一人ひとりが「キリストの〝えだ〟」として日々、それぞれができる伝道に励んでいきましょう。全て、神様がふさわしい道を備えてくださるのですから。新しい年度に向けて笑顔でいきましょう。この原稿を書いている今朝は、春らしい暖かな風が吹いています。全ての人にとって、来年度がよい1年となりますように。

（大友太郎）

牧師の書斎から

『ローマの信徒への手紙』を読み終えました。2年8ヶ月80回の説教でした。書棚には説教準備のための参考書が10冊ほど並んでいます。その他にパソコンで読む電子書籍も何冊かあります。自分でスキャンしたものもあります。ロマ書の本文や辞書はパソコンのモニターで読みました。ノートはすべてワープロでとりました。そのためパソコン上にロマ書のフォルダを作成しました。その中には説教原稿を含め、３００あまりのファイルがあります。

ライブ配信をしていますので、1ヶ月は録画した礼拝を見ることができます。説教はすべて録音されデータとなっています。録音を聞き直したり、説教原稿を読み返したりはほとんどしません。毎週の準備に追われているため、なかなか復習、反省の時間がないというのが実情です。

以前先輩の牧師が、「日曜日その日の礼拝が終わったら、少しゆっくりして、その日の説教は忘れなさい」と言われました。そして「次の説教に新たに取り組むのです」と言われました。

日々しなければならないことがあり、下手をすると説教の準備をする時間さえとれないことがあります。そうならないように、できる限り早く次の説教に取り組む必要があることを教えてくださったと、今になって思います。

歳をとって何時間も集中することができません。また、長時間集中できるほど暇もありません。2時間単位で、それを5、6回繰り返して、金曜日中には説教原稿が出来上がるようにしています。土曜日には一応目を通してから、礼拝に出席出来ない方のために原稿を整え、送信します。その後、もう一度原稿に目を通してから、当日の説教のためにプリントします。

フォルダを残してロマ書関係の本は整理しました。最後の1年、何を読むか長老会では一任されました。一度読んだものを改めて取り上げるというより、新しいものをと考えています。（岸　俊彦）

個人消息

掲示板

○棕櫚の主日礼拝　3月24日（日）午前10：15

○受難週祈祷会　3月27日（水）
午前10：30　午後7：00

○もより教会合同受難週礼拝
3月28日（木）午後7：00
於：経堂緑岡教会　聖餐

○受難日祈祷会　3月29日（金）午前10：30

○イースター墓前礼拝
3月31日（日）午前7：30

○イースター礼拝
3月31日（日）午前10：15

編集後記

▽２月初旬に鹿児島に帰省すると菜の花と河津桜が満開でした。編集日の今日は、教会の梅が満開です。どんな時でも春はやってきますね。（酒井）

「栄　光」2024年3月号
日本基督教団　経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電 話 ：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧 師 ：岸　俊彦
編 集 ：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP　：http://kyodokita.life.coocan.jp